

国語
問題
用紙

組 番 号	氏 名
3 年 組 番	

次の文章と【一】について、後の(一)～(四)の問いに答えなさい。

六年生の弦は、父の見であるハルオジの誘いで、流鏑馬に挑戦することになった。そこで隣町で行われている流鏑馬の見学に来た。

あの駆けぬける速さのうちに、矢を背中の筒から引きぬいて、かまえて射つ。それがどれほどむずかしいことか、しろうとの弦だつて、わかる。

二百五十メートルのうちに、それを三度くりかえす。弦から見れば二百五十メートルは長いけど、射手にとっては秒ぎざみの時間との戦いになるのだろう。

「技術ばかりじゃない。これは、射手と馬の息がぴったりじゃないと、できない芸術なんだ」

ハルオジの息も、いつになくあらく、興奮しているのがわかる。

弦の頭の中に、四字熟語がするりとうかんだ。

「人馬一体っていいじゃないですか？」

「ふん。さすが受験生。だけどな。言葉を知っていても、体験していなければ、知識にすぎない」

弦は、むっとした。けれど、ハルオジのいうことは、ただし。

いつか、弦と海王が、こんなふうにできるだろうか、と考えてみても、いまはまだ想像もつかない。

弦は、ふと、かおるさんの言葉を思い出した。

「あのさ、そういえば、かおるさんからきいたんだけど……」

「なんだ？」

「海王って、捨てられそうになつていたって……いらぬ馬だつたって、ほんと？」

「ああ、そのとおりだ。……血統とか、生まれがどうか、ほんとつまらんことばかりだよ。全部、人間さまのつごうでな」

ハルオジは、その先はいいたくなさそうに言葉をにがした。

「でも、ハルオジは、海王が、いい馬だと思つたんだよね。それで、わざわざ手にいれたんだよね」

「ああ、それも、おれさまのつごう」

「理由をおしえて」

弦は、ハルオジを好奇心いっぱい顔で見あげる。

「かんたんだ。おれがもとめていた馬に、ぴったりだったからだ。出会った時、海王はひどく人間を警戒していた。自分が捨てられたことに気づいてたんだな。馬は臆病な性質といわれているけれど、その臆病にもいろいろあつてな。警戒心が強かったり、きまつた人間からしかえさを食べなかったり……。海王の場合は、臆病だから人間をきらつたんじゃない。プライドが高いんだ。つまり、自分に誇りをもっている馬なんだ」

「うん。たしかに、そういうにおいが、ぶんぶんしてくるよ」

弦はわざとらしく鼻をつまんでみせた。

「だろ。いつも、どうどうとしていて、そして、めつたなことで、とりみださない。おれはまだ、あいつの鳴き声すら、聞いたこともない」

「そういえば……おれも、聞いたことがない」

「馬は人間とおなじで、生まれたときに鳴き声をあげる。たくさん馬の子がいても、母親は鳴き声で、自分の子をさがすことができるという」

「すごいな」

「だが、海王は鳴かない……。流鏑馬の馬はな、長いもの、音のするもの、ハデなものを見ても、怖気づかない馬が、ぴったりなんだよ。おれは、海王を心から尊敬している」

「長いもの、音がするもの、ハデなもの？」

「ひづめの音が聞こえてくる。弦の前を、また、馬が駆けぬけていく。『バシユツ』」

矢が的につきささるころには、ひづめの音はずつとむこうに遠のいていく。そのころには、二本めの矢が風を切る音が聞こえてくる。

長いもの、音がするもの、ハデなものを見ても、怖気づかない馬。弦は、いま駆けぬけていった馬に、海王の大きなからだを、しっかりと重ねあわせていた。けれども、その背中の上に、弦の姿は、まだ見るこ

とができない。

（おれしだい、というわけか）

ウ 弦はため息をついた。はじめて、なにかを焦がれてつくため息だった。かるい「あこがれ」ではなく、しつかり、その大きさや恐れを感じたことから、弦の根っこに芽吹きはじめた「想い」だった。

三枚の的は、三人の射手が、それぞれ三度の走馬で、みごとに、射ぬかれた。

三人の射手が放った矢は、全部で九本。九という数字は、十進法で最高の数字で縁起がいい、とされているらしい。

（まあ、いろいろ、めんどくさそうな競技だわ）

数字にこじつけるのも、点数をつけるのも、だれかが決めたことだ。（だとしたら、おれだけの答えだつて、いくらでも見つけていいはず！結果は自分しだいだ）

もしこの先、またなにかを恐れたり、心を閉じたくなるようなことがあつても、迷わず、自分自身にまっすぐ向きあえばいい。

（大塚菜生「弓を引く少年」による。）

※1 流鏑馬＝馬を走らせながら、鏑矢で三つの的を順に射る競技。

※2 海王＝ハルオジが飼っている馬の名。

※3 かおるさん＝乗馬スクールの指導員。

【I】「文章の登場人物の言動や心情に着目して読む」という学習課題に取り組むみなさんのグループでの話し合い

まなみ	弦は、流鏑馬を見学し、「いつか、弦と海王が、こんなふうに見えるだろうか、と考えてみても、いまはまだ想像もつかない」という感想を持ちます。ここには、弦の、自分と海王は一体になることができるのかという不安の気持ちがあらわれているのではないかと感じました。
ともか	そうかもしれません。そして、ハルオジは海王を手にいれたときのことを弦に話し始めますね。
1 こうた	ハルオジは、海王が捨てられたのは「ア人間さまのつごう」だと言い、そこには、馬を血統や生まれでしか判断できない人間を非難する気持ちが込められていると思いました。
2 ゆうじ	ぼくは、「ア人間さまのつごう」という言葉には、海王の臆病な気質に気づくことのできなかった前の飼い主に対するハルオジの同情が込められていると思いました。
3 ともか	ハルオジは、自分が海王を手にいれたことも「イおれさまのつごう」だと言っており、この言葉には、海王のプライドを傷つけたことに気づけなかった後悔が込められていると思いました。
4 あきと	ぼくは、「イおれさまのつごう」という言葉には、自分のために買ったとはいえ、結果的に一頭の馬の命を救えたことにほっとするハルオジの気持ちが込められていると思いました。
ゆうじ	また、弦は、ハルオジから海王がどんな特徴を持った馬なのかを聞くうちに、海王が流鏑馬に向いているということを確信していきます。
あきと	弦のその確信は、「A」という一文に最もよく表れています。
まなみ	そうですね。最後に弦は、海王とともに流鏑馬に挑戦し、その先で何があっても、 B ことを決意したことが読み取れます。

(一) ア人間さまのつごう、イおれさまのつごうとあるが、【I】の の中で、これらの言葉に込められたハルオジの気持ちとして、最も適切な発言をしている人物は誰か。次の1～4の中から選んで、その番号を書きなさい。

- 1 こうた 2 ゆうじ 3 ともか 4 あきと

(二) ウ弦はため息をついたとあるが、ここから読み取れる弦の気持ちとして、最も適切なものを、次の1～4の中から選んで、その番号を書きなさい。

- 1 落胆 2 高揚 3 困惑 4 安心

(三) 【I】の A に入る最も適切な一文を本文中から抜き出し、その初めの五字を書きなさい。(句読点を含む。)

(四) 【I】の B に入る内容を、「……ために……」という形で、三十字以上、三十五字以内で書きなさい。(句読点を含む。)
ただし、「答え」「自分自身」という二つの言葉を用いること。

次の文章について、後の(一)～(四)の問いに答えなさい。

友だち四五人ばかり、ひととせ、^{※1あしやま}嵐山の花見に行きしことあり。けふぞ盛りならむとおぼゆるほどにて、かつ散るもある

(ある年)

(今日こそ花の盛りだろうと思われる様子で) (方では)

に、^{※2とげつぎょう}渡月橋のこなたを、川ぞひにみなかみの方へ行く。風のさと吹き荒るるに、雪かとはかり乱るる花の、^{※3となせ}戸無瀬の滝の岩波に、

(二ちの側)

(川上)

(さうと)

やがてまがひゆくなど、^アいひしらずをかし。

(なんともいえず趣深い)

^{※4}中野三郎といへる人、川中の大きやかなる^{いはは}巖に腰うちかけて、笛高やかに吹き鳴らしたるが、^ウ水音に響きあひてをかしきに、

(岩に腰かけて)

かたへにありつる法師、^{※5}「春おもしろきこゆるは」と、うち誦^ずしたりしこそ、折からをかしうおぼえしか。

(そばにいた)

(笛が春に趣深く聞こえてくるのは)

(口ずさんだこのことが)

(このときにふさわしくて趣深く思われた)

この法師、いづくの人なりけむ。こころにくきけしきなりつるを、物をだにいはで、やがて行き別れつるは、

(どこの人だったのだろうか)

(心ひかれる様子であったが)

^エくちをしきことなり。

(残念なことである)

※1 嵐山＝京都市西部にある山。

※2 渡月橋＝嵐山のふもとを流れる川にかかる橋。

※3 戸無瀬の滝＝嵐山にあった滝。

※4 中野三郎＝筆者とともに花見に行った友人の一人。

※5 春おもしろきこゆるは＝「笛の音の春おもしろきこゆるは花ちりたりと吹けばなりけり(笛の調べが特に春におもしろきこえるのは「花は散った」と吹くからである)」という和歌の一節。

- (一) ア いひしらずをかし とあるが、筆者はどのような様子についてそう感じているのか。その内容についてまとめた次の文の A と B に
入る最も適切な語句を、本文中から A は一字、B は二字で抜き出して書きなさい。

風がさっと吹き荒れたとき、雪のようにあちらこちらへ飛び散る A が、滝の B へとそのまままぎれてゆく様子。

- (二) イ いへる の読み方を現代仮名遣いに直して、平仮名で書きなさい。

- (三) ウ 水音に響きあひて とあるが、水音に響きあっているのは何の音か。本文中から一字で抜き出して書きなさい。

- (四) エ くちをしきことなり とあるが、このように思ったのはどんなことに対してか。最も適切なものを、次の1～4の中から選んで、その番号を書きなさい。

- 1 ローズさんだ和歌の意味をたずねられないまま、道を行き別れてしまったこと。
- 2 美しい笛の音を、友人の歌声が台無しにしてしまったのを謝れなかったこと。
- 3 声をかけるのをやめてしまったため、美しい歌声だと伝えられなかったこと。
- 4 風流の分かる人だと心を引かれていたのに、声をかけずに別れてしまったこと。

次の文章について、後の(一)～(四)の問いに答えなさい。

わたしたちは風景のなかで生き、そして暮らしています。景勝・絶景といった特別な風景でなく、ここで言う風景というのは、わたしたちの日常の風景のことです。わたしたちの生活の目印、ひいては人生の目印となっているのは、そうした日常の風景です。

自分がそのなかで育てられた風景というものに助けられてわたしたちの経験、あるいは記憶はつくられています。わたしたちの文化もそうです。風景のない文化はありませんし、芸術というものをつねにささえてきたものは、風景を深く見つめる姿勢です。

その意味では、^A風景というのは文化そのものと言っているのかもしれない。わたしたちの日々を確かにするものは、わたしたちがそのなかで生きて暮らす風景の感受であり、わたしたちが日常の在り方、生きてゆく心の在り方といったものを見さだめる手掛かりとしてきたものもまた、自分たちがそのなかで育った、あるいは育てられた風景です。

たとえば自分ではそうと思っていなくても、じつは風景のなかで感じ、思い、考えるということが、わたしたちの日々の生き方の姿勢をつくっています。風景のなかに自覚的に自分を置いてみる。^A、さまざまものがよく見えてくる、あるいは違ってみえてくる、ということがあります。

「青空に寒風おのれはためけり」(中村草田男)という、あざやかな句を思いだしますが、自分を語るのに、青空という風景、寒風という風景の感覚をもってする。そうして風景のなかに、おのれの心像をくつきりと映す。俳句の魅力は、それが季語というかたちで、風景が一人の「わたし」を語るという秘密をもつ言葉だということです。

自分たちの暮らしのなかで、経験のもち方、清濁の感覚、そういった一々に、自分が横切り、また突っ切ってきた風景が係わっている。そのように日々の風景を生きて、一人の「わたし」の経験を心に刻むということ、ずつとわたしたちはしてきたように思います。

島崎藤村の『夜明け前』という、江戸から明治への激動の季節を生きた人びとの心のたかぶりをえがいた忘れがたい物語に、木曾馬込に住む若い主人公が、自分が生まれ育った馬込を離れて江戸へ旅立つ日の、印象的な場面があります。

旅立ちの日に主人公は、村の外れの、谷をへだてた丘のうえの墓地まで上ってゆきます。そこからは村全体が見える。そうして「あだかも、(……)」

古い街道の運命とを長い眼でそこに眺め暮して来たかのように「自分の村を眺めます。

村の眺めは杉の木立のあいだに展げています。主人公は「青い杉の葉においを嗅ぎながら」しばらくそこに立つて、村をじつと眺める。そして「あそこに柿の梢がある、ここに白い壁がある」と指さしながら、自分の生まれ育った村の風景を記憶にしっかりと留めて、一人、明日のわからぬ日々旅立ちます。

わたしたちの一人一人にとっての歴史というのは、そういうふうになれぞれの記憶のなかに留められる、生きられた風景のことですが、そうした記憶のなかの風景どころか、いまのわたしたちにとって切実なのは、逆に、生きられた風景の記憶の欠如です。

^B、歌は世につれ世は歌につれと言いますが、世のはやり歌というのは風景をうたう歌でした。村に一本杉があり、トンビは空で輪をえがき、赤い夕日は校舎を染め、街の灯りはとてもきれいだ。しかしいつか若い世代のはやり歌に、風景がうたわれることがなくなって、風景は消失し、歌の世界にのこったのはとめどない感情です。

風景の感覚が見失われて、見失われたのは、風景のなかに自分がいるということの自覚です。風景のなかに自分を置くというのは、『夜明け前』の主人公が丘の上から村全体を眺めるように、遠くを見るということ、全体を見はるかすということです。そういう見はるかす視点というものが、いまわたしたちに欠落してしまっているのではないか。

いまは、何事もクローズアップで見えて、クローズアップで考えるというところが、あまりにも多いということに気づきます。クローズアップは部分を拡大して、全体を斥けます。見えないものが見えるようになった代わりに、たぶんそのぶんわたしたちは、見えているものをちゃんと見なくなつた。

風景のなかに在る自分というところから視野を確かにしてゆくことが、いまは切実に求められなければならないのだと思います。

(長田弘「なつかしい時間」による。)

※1 あだかも「あだかも」。

※2 歌は世につれ世は歌につれ「歌は世の成り行きにつれて変化し、世の様子も歌の流行に影響される」。

※3 クローズアップ「拡大して映すこと」。

(一) ^ア風景というのは文化そのものと言っていいのかもしれませんが、とあるが、筆者がこう考える理由として、最も適切なものを、次の1～4の中から選んで、その番号を書きなさい。

- 1 自分ではそうと思っていなくても、風景のなかに自覚的に自分を置いているから。
- 2 わたしたちの特別な風景が、わたしたちの文化や人生の目印となっているから。
- 3 それぞれの経験や記憶でなく、わたしたちは風景のなかで生き、暮らしているから。
- 4 わたしたちの文化は、わたしたちが育てられた風景によってつくられているから。

(二) 本文中の A と B に入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを、次の1～4の中から選んで、その番号を書きなさい。

- | | | | | |
|---|---|-----|---|------|
| 1 | A | つまり | B | ところが |
| 2 | A | ただし | B | なぜなら |
| 3 | A | すると | B | たとえば |
| 4 | A | しかし | B | そのうえ |

(三) ^イいまは、何事もクローズアップで見えて、クローズアップで考えるということが、あまりにも多いとあるが、その結果、わたしたちはどうなったと筆者は述べているか。その内容を、本文中の言葉を使って、三十五字以上、四十字以内で書きなさい。(句読点を含む。)

(四) 本文で述べられている内容に合っているものとして、最も適切なものを、次の1～4の中から選んで、その番号を書きなさい。

- 1 経験のもち方、清濁の感覚、自分が横切り、また突っ切ってきた風景こそが、明日のわからない日々への旅立ちをささえるものとなる。
- 2 風景のなかで感じ、思い、考えることがわたしたちの日々の生き方の姿勢をつくっているの、部分を拡大して見るのが大切である。
- 3 若い世代のはやり歌に風景がうたわれることがなくなつて、風景は消失し、歌の世界にのこったものは、その人自身の歴史である。
- 4 わたしたちは、風景の感覚が見失われたことで欠落してしまった、風景のなかに自分がいるという自覚を取り戻すことが必要である。

四

ゆりさんは、総合的な学習の時間に「本を読むことの効果」について調べたことを発表することになり、次の【発表原稿】を作成した。【資料】は、発表のためにゆりさんが用意した資料である。これらについて、後の(一)～(四)の問いに答えなさい。

【発表原稿】

私は、高校生とその保護者が「本を読むことの効果」についてどのように考えているかについて調べました。

次の【資料】は、平成二十六年に、文部科学省が全国の高等学校の生徒・保護者を対象に調査を行った「高校生が本を読むことの効果についての認識」の結果をあらわしたグラフです。

本を読むことの効果として、生徒からの回答割合が最も高かったのは「物語などを楽しむことができる」で、次に高かったのは「気分転換になる」でした。

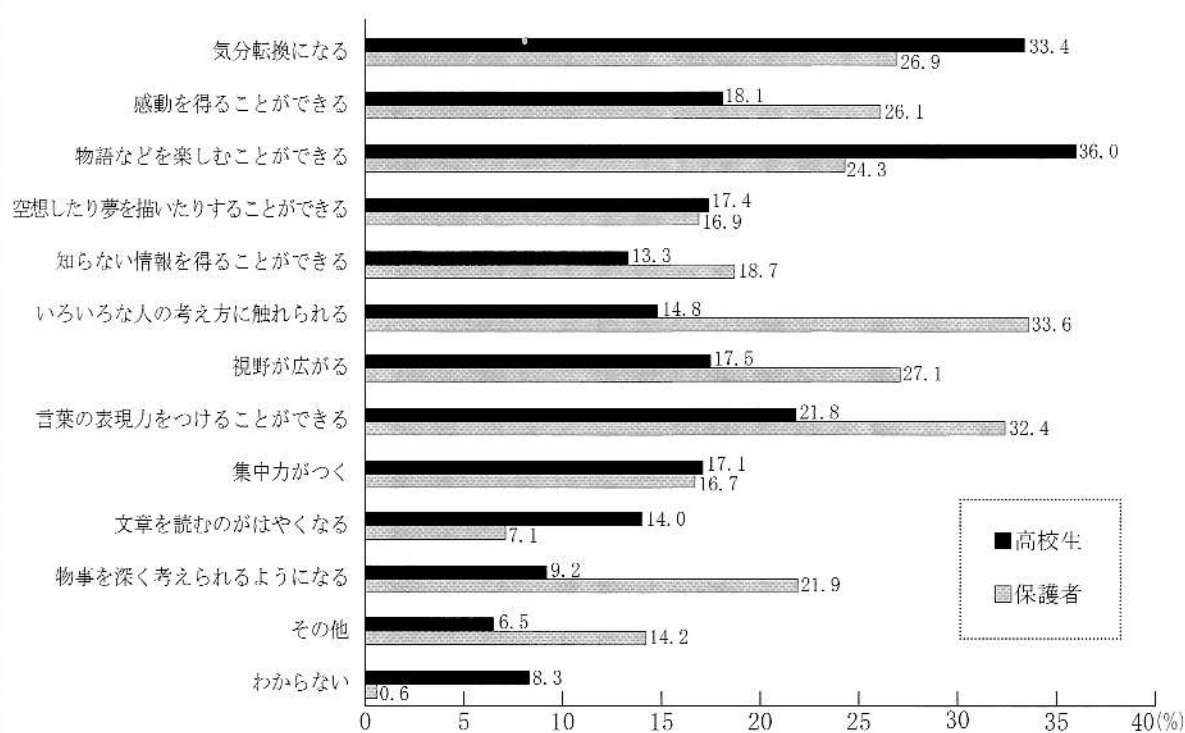
また、保護者の回答として、最も割合が高かったのは、「いろいろな人の考え方に触れられる」で、次に高かったのは「言葉の表現力をつけることができる」でした。

私はこの調査から、高校生は、学習の合間の自由時間などに、リラックスするための手段として本を読む人が多いのではないかと考えました。一方で、保護者は、読書することで感動を得たり、積極的に他者の考えに触れて視野を広げたり、語彙などの表現力を高めたりするといった効果を期待している人の割合が高く、両者の認識には違いがあることがわかりました。

私は、高校生が本を楽しむののために読んでいるのに対して、保護者は本からさまざまなことを学んでほしいと期待しているため、このような違いが生まれたのではないかと思いました。

【資料】

高校生が本を読むことの効果についての認識



(平成 26 年度文部科学省「高校生の読書に関する意識等調査」より作成)

(一) 【発表原稿】の^ア高かつの活用形を、次の1～4の中から選んで、その番号を書きなさい。

- | | |
|-------|-------|
| 1 連用形 | 2 仮定形 |
| 3 未然形 | 4 連体形 |

(二) 【発表原稿】のイ積極的の対義語を、漢字三字で書きなさい。

(三) 【発表原稿】の工夫されている点として、最も適切なものを、次の1～4の中から選んで、その番号を書きなさい。

- 1 聞き手の共感を得るために、自分自身の経験を交えながら話している。
- 2 聞き手の興味をひくために、呼びかけや比喩表現を効果的に用いている。
- 3 聞き手に分かりやすく説明するために、二つの事柄を比較して話している。
- 4 聞き手への説得力を高めるために、資料中の具体的な数字を引用している。

(四) あなたは、本を読むことでどのような効果があると考えますか。あなたの考えを書きなさい。ただし、以下の条件に従うこと。

- | |
|---|
| 1 百字以上、百五十字以内で書くこと。(句読点を含む。) |
| 2 二段落構成とし、第一段落には、あなたが考える本を読むことの効果を書くこと。第二段落には、そのように考える理由を書くこと。 |
| 3 正しい原稿用紙の使い方をすること。ただし、題名と氏名は書かないこと。また、{ や 等の記号(符号)を用いた訂正もしないこと。 |
| 4 文体は、常体「だ・である」で書くこと。 |

五

次の(一)～(四)の問いに答えなさい。

(一) 次の(1)～(6)の——線部について、片仮名の部分を漢字で、漢字の部分の読みを平仮名で書きなさい。(漢字は楷書^{かいしよ}で書くこと。)

(1) 知恵をハイシヤクする。 (2) 友人にチュウコクする。 (3) 罪をサバク。

(4) 多くの鳥が越冬^{えつとう}する。 (5) 歴史の科目を履修^{りんしゆ}する。 (6) 今の状況を踏まえる。

(二) 「乾」と総画数が同じものを、次の1～4の中から一つ選んで、その番号を書きなさい。

1 納 2 盛
3 度 4 善

(三) 次の行書で書かれた漢字の部首名を平仮名で答えなさい。

庭

(四) 「馬の耳に念仏」ということわざの意味として最も適切なものを、次の1～4の中から選んで、その番号を書きなさい。

- 1 少しの元手や努力で、大きな利益を得ること。
- 2 身の程をわきまえず、人の真似^{まね}をして失敗すること。
- 3 用心に用心を重ねて、物事を慎重に行うこと。
- 4 いくら意見をして、まったく効き目がないこと。